

古典学への期待

上山 春平

京都大学名誉教授

(1) 「軸の時代」と古典学

第二次大戦直後、哲学者のカール・ヤスパースは、キリストの出現を世界史の根本的な転回軸と見る西洋中心の見方を改めるために、「軸の時代」という概念を提唱した。

その軸は西洋だけでなく、インドやシナ、そして全世界にとっての軸でなければならない。ヤスパースが提示した「軸の時代」は、西暦紀元前500年あたりを中心として、前後数世紀に及んでいる。

まさしくこの時代こそは、今日の古典学が研究対象としている古典の原形が、西洋、インド、シナなどのさまざまな地域において、哲学、文学、歴史、宗教などのさまざまな姿をとって、春の花々のように次々と開花した時代であった。

(2) 文明と古典

「軸の時代」に世界史上に登場した古典群は、たとえば、儒教や仏教の経典とシナ文明、ギリシア・ラテンの古典やキリスト教の聖書と西洋文明、ヴェーダーやウパニシャッドとインド文明、といったぐあいに、特定の文明と不可分の関係を結ぶ点が注目される。

わたくしは、古典と文明との関係について、古典を「文明の遺伝子」にたとえることができるのではないかと考えている。遺伝子が個体の特質を新世代に継承させる役割を果たすように、古典は文明の特質を新しい担い手たちに継承させる役割を果たす。

(3) 2つの「軸の時代」

文明と古典の関係を考えるばあいに、是非とも確認しておきたい点がある。まず、ヤスパースのいう「軸の時代」は、農業社会の文明（第一次文明）を前提としているということ。そして、わたくしたちは、現在、農業社会の文明から工業社会の文明（第二次文明）への過渡期に生きているということ。さらに、十七世紀以降数世紀

にわたるこの過度的な時代は、第二の「軸の時代」とも言うべき新たな古典群の一斉開花の時代ではないかということ。

(4) 「古層の古典」と「新層の古典」

いま、かりに、第一の「軸の時代」の古典を「古層の古典」、第二の「軸の時代」の古典を「新層の古典」と呼ぶことにしよう。

両者を比較してみると、「古層の古典」の方が、西洋、インド、シナといったぐあいに、かなりな広域を単位とする複数の異質な文明のどれかと密接な関係を示すのに対して、「新層の古典」の方は、これまでのところほとんど西洋に集中されており、しかも地域をこえた普遍的な性格が濃厚である。

「古層の古典」が複数の文明の異質性を存続させる役割をはたすのに対して、「新層の古典」は異質性を克服する役割をはたす。

(5) 古典学への期待

今日の古典学は、「新層の古典」によって提示された新たな学問方法によって、「古層の古典」の解説、注釈、翻訳、解説等を行うことを基本的な課題としている、ということができるとはあるまいか。

こうした研究活動の社会的貢献の可能性は、きわめて多方面にわたっていて簡単に要約することはできないが、わたくしがとくに期待をよせているのは次の二点である。

まず第一に、古典学の成果が広く人々に提供されることによって、人々が自らの所属する文明の個性に対する認識を深めると同時に、異質の文明の特質に対する認識をも深めることができるならば、工業化にともなう文明の一律化の動きに対して多様化の動きを織りまぜることが可能となるにちがいない。

次に挙げたいのは、「文明の衝突」に対するブレーキの提供である。最近、政治学者のサミュエル・ハンチントン教授は、これからの国際政治の中心問題は、異った文明を背景とするグループの対立、すなわち「文明の衝突」であろう、と提言して大きな反響を呼んだ。半世紀にわたって、国際政治の中心問題であったイデオロギーの対立にとって代わるのはこれだ、というのである。

たしかに、この提言には傾聴すべき点もあるが、工業社会の文明（第二次文明）のもとでは、農業社会の文明

(第一次文明)のもとでつくられた異文明間の壁が次第にくずれつつあることも、注目されねばならない。

古典学が「新層の古典」に由来する新たな方法を用いながら、さまざまな文明に属する「古層の古典」を対象

として取り上げ、その上で異文明間の古典の比較研究を深め、さらに一步を進めて、それらの成果を広く人々に提供する道を開くならば、「文明の衝突」のブレーキとして役立つ点が少なくあるまい、とわたくしは思う。

パネルディスカッション

木田 章義 (日本学)

日本文学の中で何を古典と呼ぶべきかという点については、上山先生が『源氏物語』がかろうじて古典と呼べるのではないかとされたことに大いに気を強く致しました。実は、この重点領域の計画の当初の会議で、日本の古典については、何を古典と呼ぶべきかはなはだ迷うということを示し上げたことがあります。昨日の報告の中でも、日本分野では何を古典として、研究対象としてゆくかということをごくごくと申し上げたのも、そういう思いがあるからでした。『源氏物語』や『万葉集』は古典文学として疑問を持つ方はあまりないと思います。しかしそれはこのような世界の古典を集めて、比べる機会があると、これらの文学作品が古典と呼ばれるものとは少々異質な感じがすることに気づきます。

この異質な感覚の生じる理由は、日本において古典と認識され、人の生きる道を教えたり、世界を把握させる教えとなったものが、一貫して、正式には漢文文献だったという点にあります。中国の文化を模範とした日本では、学ぶべきものは、明治になっても、まだ漢文であったということです。従って日本における古典というものは、儒教の経典や『史記』のような歴史書、『文選』のような文学、『金光明最勝王経』のような仏典、『玉篇』のような辞書などが、研究するに値するものでした。日本人が仮名を交えて書いたものは、価値の下がるものであり、数寄者の世界のものであるか、一般大衆向けのものかと捉えられておりました。誤解を恐れずに言えば、日本に於て「人間と世界に関する精選された知識の集成」という定義に合った古典は、一貫して中国古典であったということもできるのです。しかも学ぶべき漢文文献自体にも流行があって、明経道の儒教経典の古注釈から、紀伝道の『文選』『史記』など、そしてまた儒教経典の新注と移り変わります。仏典に於ても南都六宗から真言宗・天台宗、そして浄土宗などと変遷して行きました。そのために、仮名交じりで書かれた文献は、古典として、あるいは学ぶべき対象としては、意識されなかったのです。もちろん研究は行われておりましたが、それはやはりまだ思想や哲学などを学ぶというのではなく、理解する、注釈する、和歌を読むときの典故とするという

レベルでした。

これは現在でも見られることで、一般社会で、『論語』などの漢文の一節を解説すると学があると感心されますが、一首の和歌を解説してみせても、学があるとは評価されません。序文は漢文的な表現にしなければ、格調が高いとは評価されません。このように現在の私達にまでも、漢文が学問であり、哲学であり、思想であるという固定観念が根強く残っていることが分かります。

報告の中では、日本人の心性を作り上げたものが日本の古典であるという定義をしておきましたが、それでは、日本の古典はいわゆる「古典」ではないのでしょうか？

話は飛びますが、私は日本人や日本人の生活パターンは羊のようだという感じを持っています。

羊は、あまりに寒くなると横の羊の腹の下に首を突っ込み、その羊はまた横の羊の腹の下に首を突っ込み、密集して動かなくなります。鞭打たれても、犬をけしかけられても、目の前の寒さに、動こうとはしません。また、畜舎に帰らせようとしても、強い風が吹けば、その風に向かって歩くというような労力を費やさず、風に流されて、風下へ風下へと歩いて行きます。そういう事態を避けるために、何匹かの山羊を群に混ぜておくと、山羊の後について、畜舎に帰ってくるそうです。山羊は西欧人の生活感、羊は日本人の生活感という風に感じられます。山羊は、風が吹こうが、寒さが来ようが、決められた通りに、または、自らの(又は教えられた)意志で行動し、羊はその場の状況に応じて、行動するという事です。一般的に言えば、羊は愚かであると見えますが、それは羊を利用しようとする人間の立場からの視点です。羊にとっては、寒いから密集するというのは合理的ですし、強い風に向かって畜舎に帰るべきであるというのは、人間の都合であって、風下へ流れて行き、新しい餌を得るというのも一つの行動原理として認められるでしょう(あまり寒いとそのまま凍死してしまうこともあるそうですが)。一般的には、山羊のように生きることが人間として尊いと考えられがちですが、果たしてそうなのでしょうか。

これは、現在の我々の意識では、西洋の価値観の影響を受けているということをご考慮する必要があります。我々は、人間は自分の意志ですべてを決定することが望